

高温多湿環境下におけるストレス負荷と寝衣ゆとり量との関連

○奥野右子* 宇庭美樹** 三田禮造***

(*東北女子大学, 東北女子短期大学**, 弘前大学***)

＜目的＞ 先回と同様、高温多湿環境下における就寝時のストレス負荷を、今回は寝衣のゆとり量の影響の面から検討した。

＜方法＞ 1) 条件設定・環境温湿度 約30℃, 寝衣のゆとり量 身巾 袖底 屈伸量
 70%RH・負荷時間 8時間・測定時 覚醒直後・ 多めの快適寝衣 2.5 1 2
 負荷期間-負荷当日(2日間) 安定日～負荷翌朝 少なめの不快寝衣 1.5 0 0
 最終日まで(延べ6.5日間)・実験食 約1830Kcal/日 2) 実験衣 形態-長袖・長ズボン, 材質
 一綿100% 3) 被験者 20～22歳成人女子10名 4) 測定項目・自覚症状(日本産業衛生学会、
 産業疲労研究会)・尿中カテコールアミン・体温・血圧・心拍数・発汗量

＜結果＞ ゆとり量多めの快適寝衣と少なめの不快寝衣の自覚症状結果について、尿中カテコールアミン測定結果をみると、いづれにも有意な差がみられる。また、被験者全員がゆとり量少なめの不快寝衣着用時にストレスを感じており、これらのことから寝衣のゆとり量を変化することによって、身体に加わる負荷を軽減させることが出来るということが考えられる。